五代教主作 灰釉茶盌 銘「宝の入船」

題字 出口直日

通巻 第516号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL 03-3821-3701
(IP) 050-5510-9502
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

心をも身をもまかせて祈りなば
神はまことの力たまはむ

出口王仁三郎聖師

青少年よ〝祭式〟を学ぼう！

祭務課長 和田桂一

皆さんの中には、子どものころの記憶に、親たちが手に笏を持って、立ったり座ったり……、大麻をサッと振ったりクルッと回ったり……、何か不思議な姿や動きをしていた風景が残っていませんか!? また、祭典中であろうがおかまいなしに、大人たちと同じ動作をしたがったり……。実はこれこそその子にとって、大本祭式に触れ興味津々で、真似をして同じ動作をしてみたい！ という〝祭式講習意欲〟の目覚めにほかなりません。そんな時は祭典が終わった後に、ぜひとも祭式の手ほどきをしてあげてください。これは、他愛もないことでありながら、祭式を通して〝神さま〟と親しむ、大きな動機づけの一つになり得ます。三つ子の魂百まで。幼いころのさり気ない祭式との触れ合いが、祭式の煩わしさのハードルを確実に下げてくれます。

次のチャンスは少年少女から青年期にかけてやってきます。青少年部活動の中で、聖地で開催される「青少年祭」の奉納種目である〝模擬祭典〟に、地元の代表として出場することです。これは祭式の力がかなり鍛えられ、大きく技術が向上することが期待できます。

また、少年祭員として各分所・支部で積極的に登用していく。毎月でなくとも、年に二回くらいは、斎主以外の祭員を青少年で揃える。そのために、みっちり祭式の個人レッスンを行う。実は、この時期が人生の中でも、祭式を学ぶ最良の時期なのです。

祭式を学ぶといっても、高度な内容をともなった鎮座祭や遷座祭、冠婚葬祭ではなく、各家庭で執り行う毎月の月次祭、祖霊さまの年祭程度の祭典は、奉斎家庭の信徒であれば、青年は運転免許の取得と同様に、必須にしてほしいものです。青年期に祭式に触れておけば、しっかりと身に付いて、生涯忘れません。

青少年よ〝祭式〟を積極的に学ぼう！ そして、その環境を整えるのは、私たち周りの大人です。三月は祭式講習会の季節です。

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」より

大本の神示と世界の将来

―人類への預言と警告―

講師 森（もり） 良秀（よしひで）
（東京宣教センター次長）

大本のはじまり

本年、大本は開教して百二十年を迎えます。干支でいうところの壬辰（みずのえたつ）にあたり、一日に例えると、夜明けを過ぎていよいよ活動に入る時期になります。

明治二十五（一八九二）年の旧正月五日、新暦節分の夜に、現在の京都府綾部市で、当時五十六歳の出口なお刀自が突然神がかりをしたことから、大本は始まりました。

神がかりがはじまる前の数日間、なおは毎晩不思議な霊夢を見ます。そこには、荘厳な宮殿楼閣が幾層ともなく建ち、なおが表門をくぐっていきますと、神々しい神さまが「よく来たな」という感じで迎え入れました。神さまは手を差し伸べて、なおをさらに奥の大きな門をくぐって中へ導いてくれます。そこは、先ほどの建物以上に荘厳で極めて美しい神殿がたくさんに建ち並び、中央の建物に誠に神々しい神さまが光り輝いてなおの目の前に立っておられます。なおはあまりの状況に驚き、胸は血踊り、気分は高揚してまいります。と、忽然と夢から覚めるのです。この様な霊夢が三日、四日と続き、なおはだんだんと神仙の世界に入っていきました。

五日目、旧正月五日、新暦二月三日の節分の夜、突如として出口なおの肉体に神がかり状態の発動が起こりました。なおは、下腹に熱い塊を感じ、それがドンドンと上にあがり、ふさぎ下ろそうと一生懸命踏ん張りますが、それ以上の力が胸、喉を通って口から出てきました。

出てきたのは底力のある強い男の声でした。普段は優しく口数の少ない控えめな出口なおでしたが、表情も男のような厳しい顔になりました。

口を通して出てきた最初の言葉は、『三千世界一どに開く梅の花、艮（うしとら）の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。この世は神が構わな行けぬ世であるぞよ。いまは獣類（けもの）の世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの世であるぞよ。神が表に現れて、三千世界の立替え立直しを致すぞよ』

これは「初発の神諭」と申しまして、大本のお筆先の中で最も大切な教示です。

『三千世界』は、私たちが住んでいる「現界」と、神さまの世界である「神界」、そして根底の国（地獄）である「幽界」の三界、また過去・現在・未来を指します。

『梅で開いて松で治める』とありますが、梅の花はご存知のように、厳冬に耐えながら芽造りを行い、春になればすべての草木に先立って花を咲かせる、苦労の塊の花です。

また松は、春夏秋冬一年を通して葉の色が変わらない、誠一筋の意味です。

大本はなぜ出現したのか？

『艮の金神の世に成りたぞよ』と主張される金神とは、果たしてどういう神なのか、この世界をどうしようとされるのか。ここは大本出現の眼目です。

出口なおにかかられた艮の金神は、この世をお造りになられた元の神（根源神）で、「日本書紀」に最初に出てくる国常立尊（くにとこたちのみこと）さまです。

国常立尊は、太古の神代の時代の主宰神でした。至厳至直、善一筋の政治を敷かれたために世界は穏やかに治まっていましたが、時代が過ぎると共に不満分子の我よしの神々が、こともあろうに国常立尊を隠退させてしまいました。その上、悪神、祟り神の鬼門の神として、三千年の長きにわたって押し込めてきたのです。この隠退されていた間のご神名を「艮の金神」と申し上げます。

絶対の権威を持つ神がどうして押し込められたのか、素朴な疑問が残ります。でもこのような見方が出来ると思います。

人間には自由意思があり、神に従うこともできれば、神を無視し、背くことも出来ます。人の心の中に「良心」はあっても、良心の声を無視すれば、その良心を心の隅に隠退させたと言えます。

また、人間の生涯を見ても、成人期までは利己的であり、他を犠牲にしても頓着しない。親の苦労に気兼ねしない。それから、「体主霊従」の期間があったから、物質文明も豊かになったのも事実です。これらは一面仕方ないことです。

しかし、いつまでも利己的で、物欲に執着した「体主霊従」の在り方でこのまま先に向かうと、元の泥海になると。絶体絶命の危機を迎え、ここにご再現されたのです。

お筆先の内容

お筆先は、神がかりした国常立尊が、読み書きのできなかった出口なおに筆を持たせて、総仮名文字で書かれたもので、二十七年間に渡り半紙二十万枚におよんでいます。

書道家や評論家は、この筆先を『筆の最初のあたりから終りまで、殆ど等しい筆圧、等しい幅、等しい早さをもって書かれている。これは終始かわらない精神状態を保っていることを物語っている。これが半紙二十万枚におよぶということであるから、驚嘆の外はない』と絶賛しています。

その内容は、一貫して「世の立替え立直し」と、人類の「改心」を迫り、日本や世界の将来についての預言と警告が示されています。

お筆先は、大きく二つの内容に分けられます。一つは時節が到来し、神が表に現れて、この末法の世を立替え立直し、地上天国「みろくの世」を創るという、神さまの目的を教え諭した預言です。もう一つは、みろくの世実現の過程において不幸や災害、越えるべき大峠についての警告です。

太平洋戦争で日本は負けましたが、この戦争もお筆先は預言していました。

『いまに世界中の大戦争になりて来て、世界の人民が大変に苦しむことが出てくるから、日本の人民みな、油断をいたしておりたら、日本の役目が務まるどころか、国が危いことになりて、いったんは、日本の人

民も途方にくれて、チリヂリ舞を致すことが出来いたすぞよ』

預言通りになったというので、大本に対する世間の評価が大きく変わりました。そして、その話を耳にしたある信徒が出口王仁三郎に得意顔になってそのことを報告したところ、王仁三郎は憮然として『自分は預言が当たらないように努力してきたのに、結果としてこうなってしまって、誠に残念だ』と答えました。

たとえ預言が最悪の想定であっても、人間の努力によって回避したり、小さい形で治めたりすることができるというのです。正に神の御手に預けられています。大本では「豫言」でなく、「預言」と書かれた意味もここにあります。

立替え立直しとは

〈立替え〉は、破壊、解体を指し、〈立直し〉は、建設、造営することを指しています。

体主霊従的行動を立替え、一切を霊主体従に立直すことです。

現代は神さまの存在を忘れた物質本位の世の中であり、精神的光明を失った暗がりの世の中であり、我よし強いもの勝ちのやり方で、悪の栄えている世の中です。このような体主霊従の世の中を立替えされるのです。

強いもの勝ちの獣の心、利己的で排他的な考え方を改め直さなければなりません。

貧富の差、格差社会を無くし、お互いが幸せになる世の中。そして人も良し、我も良し、社会も良しの三方良しの世界をつくっていくことが、立直しです。

戦争も天災も一つの立替えではありますが、お筆先では戦争や天災で立替え立直しができたら、こんなに楽なことはないと言い切っています。

また立替えは、神の経綸によってなされ、一方立直しは、私たち人間が取り組んでいくものと示されています。

そのためには、まず一人ひとりの魂の立直しが不可欠です。

私たちは日常生活の中で、愚痴や不平不満、嫉みといった良くない感情を抱くことがありますが、この感情を薄めていく努力をすることが魂の立直しにつながります。

次に社会国家の立直しです。

ここでも強いもの勝ち、物質本位など精神性を無視した状態が反映しているわけですが、その国を治めていく機構も立替えていかなければなりません。

昨今注目されています橋下徹大阪市長が取組んでいることも、ある意味で大きな立直しであると思います。人間の努力において、現状を突破していくことが重要です。

そして世界全体の立直しです。

王仁三郎は『この世界には、有形無形の二つの大きな障壁がある』と示しています。

〈有形の障壁〉とは、軍備や領土問題のことで、〈無形の障壁〉は、私たちの心の中にある敵愾心です。この有形の障壁を取り除くためには、まず無形の障壁から取り除く必要があると説いています。

国家、人種同士の敵愾心、宗教間同士の敵愾心を乗り越えて、次に有形の障壁を取り除いていくという工程です。

日本の役割

日本の国は神の教えを実行して、世界に良き鏡を出さなければならない尊い処であると示されています。

昨年三月の東日本大震災で、被災された方々の行動の貴さが、世界中から高く評価されました。日本人の本来持っている穏やかさ、真面目さが出たのではないでしょうか。

これは千葉県君津で被災された知人の話です。その方は本社に戻らなくてはいけないので、東京に向かって車を走らせていました。道路の信号は、停電のためにすべて消え、警察官も立っていない状況だったそうです。ところが、交差点ではクラクションを鳴らす車もなく、低速で皆が譲り合って通行したそうです。

また、阪神大震災の反省から鉄道、高速道路などのインフラを改善した結果、このたびの激しい揺れを受けても首都高速道路は点検だけで半日後に開通させ、新幹線の脱線事故も避けられたと語っていました。

こういった日本の素晴らしい姿を、もっと世界に知ってもらいたいが、福島原発の放射能漏れ事故で、そればかりが報道されて残念だとも話されていました。

みろくの世の姿

『水晶の神世になれば、なにごとも世の中は、思うようになるぞよ。これから世界中、神国にいたして世界の神も仏も人民も、いさんで暮らさすぞよ』

『艮の金神が表になると、一番に悪所遊びをやめさすぞよ。博打も打たさんぞよ。家の戸締りもせいでもよきようにいたして、人民をおだやかにいたさして、喧嘩も戦争もなき結構な神世にいたして、末代つづく松の世といたすぞよ』

このように、大変気持ちが明るくなるような筆先があります

昨今ニュースを見ておりましても、隠し事が出来ない世の中になってきていると感じます。昔だったら隠せた悪事がドンドン暴露されている。これは、水晶の世、みろくの世に向かっている証しではないかと思います。

みろくの世は経済的、物質的、精神的に豊かになる時代ではあるけれども、『少し貧しく、少し寒く、少しひもじく』とのお示しもあります。

〝なにもかもが豊富にある〟のではなく、それぞれの身の丈に合った幸せを、受け取らせていただく。こういった厳しい面も、みろくの世の姿です。

出口なおの生活

出口なおの生活を、孫の三代教主出口直日が、次のように書き残しております。

『形の上では、何の関わりも持たれなかったのですが、祖母は高い茶の心を身につけた、真に類まれなる大茶人であったと、心より敬っています』

『奥山に啼く鳥の、清らかな声を聴くように静かで、和紙の手ざわりのように和やかで、苔の上に打ち水をしたように、侘びたゆかしいご生活でありました』

なおの日常生活は、物を大事にする控えめな生活で穏やか、お茶でいう「和敬静寂」をそのまま体現されたものだったそうです。またその声は金の鈴を振ったように、透明感があり、清々しくて、若々しいと表現しています。

出口なおの神がかりの状態は、世にいう霊媒のそれではなく、誠に崇高で、尊厳に満ちたものであったとうかがえます。

それを思う時、この筆先がいかに内容的に深いものであり、我々人類にとって、掛替えのない教典であると言えます。

開教120年節分大祭遥拝祭

開教百二十年節分大祭遥拝祭は二月三日、午後六時三十分より斎主・森良秀東京宣教センター次長のもと執行され、百一人が参拝した。

祭典後、大本神諭の拝読、斎主・祭員による豆まきが行われ、次いで浅田秋彦東京宣教センター長があいさつをのべた。

その後、参拝者はダルマや今年の干支・辰の飾り物が当たる福引を楽しんだほか、食堂にて温かい甘酒が振る舞われた。

なお、東京本部では節分大祭で奉迎されたご神水による清祓行事を二月二十二日と二十四日の両日、多摩川（西多摩郡白丸ダム）、荒川（二瀬ダム・埼玉県秩父市）、利根川（群馬県渋川市坂東橋）で執り行った。

祭典後、にぎやかに豆まき行事が行われた

東光苑月次祭

東光苑月次祭・豊年祈願祭・市杵島姫命例祭は二月十二日、午前十時三十分から、斎主・和田桂一祭務課長のもと執行され、三百七十五人が参拝した。

祭員は関東教区青松会員、少年祭員は東京主会の涌井大嗣郎くん、山梨主会の小池翔音くん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は飯田俊明茨城主会長、添釜は村井社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつにたち、本年度教団方針に謳われている〝みろくの世への実践〟や各機関にご下付された教主さまご染筆『和合の梅』などを紹介した。

続いてバリド・アンフバヤル大本モンゴル本部現地本部長があいさつを行い、昨年三月に神道として初めてモンゴル国で宗教法人の認可を得たことや現在の活動について紹介。「日本とモンゴルの架け橋になる人材を育てたい」と流暢な日本語で抱負をのべ、参拝者から盛大な拍手がわき起こった。

バリド・アンフバヤル大本モンゴル本部現地本部長

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第一〇八回大本公開講座『出口なお・出口王仁三郎の世界を語る』は、二月十五日午後七時から八時三十分まで、港区新橋の航空会館において、浅田秋彦東京宣教センター長を講師に「立替え立直しの仕組―神界のプログラム」と題して開催された。参加者は三十一人（内、一般十五人）。

講座では、出口王仁三郎聖師の生い立ちのほか、大本入りしたのち生涯をかけて示し、活動した〝救世の神業〟について解説。

参加者からは「大本事件について強く興味があったので、とても勉強になりました。また『霊界物語』の口述や〝型の大本〟についても、とても興味深かったです（三十七歳・男性・一般）」「大本の歴史を聴き〝型〟を意識して、自分の中から出る〝型〟にも気をつけようと思いました（五十二歳・女性・一般）」などの感想が聞かれた。

第30回企業繁栄祈願祭

今年で第３０回目となります「企業繁栄祈願祭」を、下記の要項で執り行います。

経営される企業、また勤務先の企業や事業所などの繁栄・弥栄はもちろんのこと、日本、そして世界全体の経済の発展をご祈念申し上げます。

長引く不況を乗り越えるためにも、ぜひ企業繁栄祈願をおすすめいたします

日　程　４月２２日（日）午後２時３０分

会　場　大本東京本部・東京宣教センター

申し込み　ご希望の方は申込用紙を送付しますので、下記までご連絡ください（なお昨年お申し込みいただいた方にはこちらから郵送いたします）

申込先　〒110-0008 台東区池之端 2-1-44
大本東京本部　総務管理課

※ 玉串は後日郵送か当日持参かを必ず明記してください

玉串料　一企業１万円以上（申込書に添えて玉串袋にてお納めください）

締　切　４月１６日（月）

※ ご祈願は４月２８日までの１週間執り行います

東光苑祭典・行事予定

3月

東光苑月次祭・春季合同慰霊祭
11日（日）午前10時半

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」
講題　一つの神、一つの世界、一つの言葉
―みろくの世への道筋―
講師　森 良秀（東京宣教センター次長）
21日（水）午後7時～8時半

東光苑春季祭式講習会
24日（土）25日（日）

二代教主六十年祭
31日（土）午前10時半

4月

観桜茶会
1日（日）午前10時半

開教120年東光苑春季大祭
8日（日）午前10時半

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」
講題　激動の時代をいかに生きるか
―幸せは不幸の顔してやってくる―
講師　藤原直哉（シンクタンク藤原事務所会長）
18日（水）午後7時～8時半

第30回企業繁栄祈願祭
22日（日）午後2時30分

四代教主毎年祭（11年）
29日（日）午前10時半

毎週月・水・金曜「常設対外講座」開催中
［昼の部］講話　午後2時～3時半
［夜の部］実習　午後7時～8時半